

田辺市立小中学校あり方検討委員会 第7回会議 発言要旨

1. 日時：平成21年6月13日(土)午後1時30分～午後4時00分

2. 場所：上秋津農村センター 大会議室

3. 出席者：委員：加治佐委員、泉ふ委員、城委員、山本な委員、松本委員、野上委員、廣田委員、竹中委員、柿平委員、岡山委員、大倉委員、森本委員、中山委員、泉と委員、

事務局：濱田次長、廣田学校教育課長、弓場教育総務課長、鈴木龍神教育事務所長、西川中辺路教育事務所長、岩本大塔教育事務所長、杉本本宮教育事務所長、林指導主事

傍聴者： 3名

4. 議事概要

(1) 小中学校の適正規模について

(2) 小中学校の学校配置について

討議内容

小学校

A委員：よろしく申し上げます。今日は3名の方が傍聴を希望しているが、許可してよろしいか。

全員：よい。

事務局：それでは、本日の議題につきまして委員長、よろしくお願い致します。

A委員：1点目は、適正規模には色々な考え方がある。そこで、児童生徒数により、レベルを設定し、その設定の中で色々考えられることを示した。そして、小学校ではレベル3、学級の適正人数を25人と考えて、6学級、25×6で150人とした。中学校の場合は、クラス替えが可能で、且つ、1学級が25人として、1学年50人とした。よって、中学校も150人。これについては、前回、一応の了解はいただいている。今日はそれに係わる資料をあらかじめ用意している。特にレベル3の根拠を、事務局の方から説明していただく。

事務局：資料説明

A委員：小規模校全般について利点、課題、さらにより具体的に4つのレベルの長所と課題、そしてレベル3を採用する理由を丁寧に説明していただいた。

B委員：この小規模校の利点と課題であるが、課題の方がどうしても心情的に納得できない。5番のようなことはよくわかる。1番などを見ると、競争心や社会性が育ちにくい。単純に考えたらそうだ。競争の場があまりない、多くの人と接することができない、そのような小規模校出身の子は高校でなじめないのか、学力的に問題があるのか、社会の中で適応できないことがあるのかどうか。一般的な観点でこういうことを書いていいのかという気持ちがある。教育の中で競争心を育てることが教育なのか、競争心と教育はどういう関係があるのか、その辺を再確認させてもらいたいと思う。

A委員：2つの点について、ご指摘があったと思う。小規模校だったら競争心とか社会性が育たないのか、ということ。価値観の問題ですが、競争心を育てることが

ねらいなのか、ということ。校長先生方何かありませんか。では、私が代わりにお答えする。おっしゃっている意味はわかる。いろんな子どもがいて、いろんな先生がいて、いろんな学校がある。だからそれは個々のケースをみたら、競争心や社会性が育って、その子に弊害がなかったということはあると思う。ところが、これは個々のケースを言っているのではなく、一般的に見てどういう傾向があるかということを行っている。全般的に言えることはどんなことか、ということを行っている。必ず例外はある。小規模校の場合、競争心がなくなるということは、これは言えることだと思う。よその地域で同じことが言われている。田辺が特殊でもなんでもない。どこへ行っても言える。こういう書き方をしているのは間違いではない。高校や社会に出てからどうかということについては、これもまたいちがいに言えない。結果的には一人の人が苦勞したとか色々なことがあってのことだと思う。一般的には言えることだと思う。2番目の競争心を育てることですが、学校教育では、集団の中で教育することも大事なことであると思う。社会という集団の中で生きる力を養う、これは普遍的な教育目的。競争心を養っていくというのは学校教育に与えられた一つの使命でもある。その点小規模校は不利であるというのは言える。もちろん例外はある。

A委員：それは一般論としてよくわかる。今、子どもを育てるということは、これからの日本・世界を担っていく若者を育てるということである。経済活動等を中心に考えていく時、競争心や社会性を重視することは大切であると思う。しかし、もう一方、環境問題がクローズアップされる中で、自然との共存・共生、そういう教育もしていかなければならないと思う。そんなことまで「学校のあり方検討委員会」では考える必要があるのではないか。そのあたりのことを考えずに「これが適正である」と出すということに抵抗がある。

C委員：言われる意味はよくわかる。それぞれの立場で、考え方を表明していくという部分もある。A小学校さんの置かれている立場での意見だと思う。現場での話で、3校の卒業生がうちの学校にきている。ある小学校の卒業生は2人だった。しかし、今は26人のクラスになっている。その子たちに「どうですか?」と聞いたら「楽しいです」と言っていた。中間テストが終わって、テストを返された時、点数を見て、互いに切磋琢磨していく。それを見ていると、点数の話で申し訳ないが、競争しながら伸びていくというのはあると思う。

D委員：競争心という言葉は、色々な取り方あると思う。子どもたち同士で切磋琢磨するとか、刺激し合うという風にとっていったらいいのではないか。ある程度の人数の中で活動している子どもたちを見ていると、「負けたくない」とか「1番になりたい」とか「やってみよう」とか、そういう力はある程度的人数の中で芽生えていくものだと思う。練りあえる中で育つものが大きいと思う。

E委員：よくわかる。ここまで話が進んでいると収拾がつかなくなると思うが、余談で。日本という国を見てみると、教育格差があると思う。都会には、レベルの高い仕事についている人もいれば、レベルの高い経済活動がある。しかし、一方、最近ではストレスを抱える人も多く、精神的な病も多くなっていると言われていいる。そこで、田辺はとなると、山あり川あり、自然あり、人間らしいあり方が

ある一方、都会の教育・競争・経済活動がないかも知れない。しかし、都会に比べ、人間のあり方には適しているのではないかとも思う。学校規模の協議を通じて、人間としてどういうあり方がいいのか、どういう心のあり方がいいのか、考えられる。本来のあり方についてはいろんな角度からどういうあり方がいいのか、疑問・矛盾を感じている。

F 委員 : 学習の場だけのことを考えたら、今年、うちの学校に新生児 1 名が入学してきた。児童 1 人と先生 1 人で学習している。算数・国語は学年の学習をしなければいけないので、1 人でやっている。音楽とか体育とか 2 年生の子どもたちと一緒にやっている。2 年生と複数で学習すると「1 年の教室に行きたくない。」と子どもが言う。「2 年生の人、お友達おっていいなあ。」とよくいう。6 年も同じ状況だが、さすがに 6 年生はそんなことは言わないが、学習の場で、一人で勉強しなければならない状況はいいのか、と疑問に思う。友だち同士一つの発問に対して、色んな子どもがいて色んな考え方を出し合い、学ぶことによって得られることは大変多いのではないかと感じる。それが出来ない。その子のおじいちゃんから「先生、統合ってまだせんのか？早くしてもらわんと困るよ。」という声も聞く。子どもが「教室に行きたくない。他のクラスはお友達がいるのに。」という。実際の子どもの声としたら何とかならないのか、という気がする。

A 委員 : 自然との共生、自然の中で子どもが育つということと、規模の問題は必ずしも直結しない。学校が大きくなったからといって自然の中で育つという面がなくなるわけではない。それはそれで重要なことだし充実させなければいけない。規模が大きくなるからといって、自然との共生等がなくならないように学校のカリキュラムの中では気をつけていかなければならない。

B 委員 : 逆戻りのような問題提起をしてしまったが、F 委員が言われたこともよくわかる。実際何年か前に中学校で統合問題を聞いた時、ほとんどみんな反対した。でも今の雰囲気ではもう統合した方がいいという風になってきていると感じる。そんな中で致し方ない方向と感じる。聞き間違いかもしれないが、あり方検討委員会では、どことどの学校をくっつけるとか、そういう話まではしない、という話ではなかったか。学校の規模はこれくらい、という答申を出すということだと認識しているが。もう一つ、僕らが出す答申はどれだけの影響力があるのか、ということを確認したい。

A 委員 : 影響力ですか。

事務局 : この委員会から頂いた答申は、教育委員会としては重くうけ止める。ただレベルいくつで、統廃合の問題になった時、即、教育委員会がそのとおり、ということではなく、教育委員会の中で、頂いた意見つまり答申をもとに充分議論する。そして教育委員会として、方針を決定し、市議会に報告する。そういう方向で進んで行く予定である。少し抽象的な言い方でわるいのですが。

A 委員 : よろしいですか。

B 委員 : 結局、地域と話し合っていくということですか。

事務局 : 龍神地域で行ってきたように、名称は別だが、準備委員会とか統廃合検討委員会とか、保護者や地域と議論していく。その時に通学の問題や施設の問題など、

物理的な問題については、教育委員会として検討していかなければいけない。先ほど「いつ統合できるのか」というおじいちゃんやおばあちゃんの話があったが、「いいわいいわ」といっても物理的に出来なかつたら、何年か待ってもらわなければならない。ケースバイケースで具体的に個々に検討しなければと思う。

A委員：確認いただきたいのは、議会等の承認等を得なければならないが、この話し合いはそれなりの影響を持たねばならないと思える。これが基本になって学校の配置とかが、考えられていくということではなければならない。もちろん地域の理解を得るとか、地域の特殊な条件があるとか、色々あると思うがその代表の方に来ていただいて話し合っているので、この結果は尊重されなければならない。いつも言っているが学校の規模を大きくするのが目的ではない。適正にしてどういう教育活動が生まれるかということが目的である。学校を大きくすれば自動的にうまくいくということではない。規模を大きくすれば大きくなっただけの、新しい教育課程を作るとか、地域との連携を今まで以上に強めるとか、小中の連携をするとか、そのために基盤となるような学校の大きさを考えることだと思う。答申の中に重要なことは新しい教育のあり方というものがないといけない。先ほど言いつたように、自然との共生とかは重要なことだ。規模が大きくなったら、これらがなくなったでは困る。次にレベル3に基づいた具体的な学校配置の仕方について事務局から説明していただく。

事務局：レベル3についての案を説明する。この資料は既に、委員さん方には配付している。この資料は、このようにする、ということではなく、あくまでもレベル3の案である。まず、この表の見方ですが、レベル3は150人程度の規模である。この児童数の基準は、平成27年度の児童数を規準にしている。また、稲成小学校の横に書いている大坊小学校に（ ）がついているが、（ ）のついている学校は、平成21年度、レベル3に達してなく、児童数が150人以下の学校であるということを意味している。また中芳養小学校のところに「 」がついているが、これは、現在はレベル3、150人規模の学校であるが、平成27年には150人以下になり、レベル3を維持できないという意味である。また、教員数については県の定数の通りで示している。14番の大塔地区の平成21年の教員数が1となっているのは、11の間違いである。市内全部の教員数でみると校長、養護教諭、事務職、加配教員を除いて数えると現在は246名、それが統合すると192名になる。平成27年度で計算すると214名が174名になる。以上が小学校についてである。中学校では、平成21年度の段階で全生徒数が150人以下の学校を（ ）で示している。中学校の場合は平成33年まで想定できるが、平成33年になると減少はきびしい。中芳養、上芳養をセットにしているが、それでも150人規模を維持できなくなり、明洋中とセットになることが考えられる。秋津川、上秋津も高雄中と一緒にになる。次に大坊小学校が稲成小学校と統合する場合と、中芳養小と統合する場合とで生徒数が少し変わってくるので示している。稲成小学校と一緒にになると高雄中に行くことになる。中芳養小と一緒にになると中芳養中に行くことになる。平成33年では上芳養中、中芳養中が統合することになるので、大坊小は明洋中に

入ってくる。次に中学校の2の表を開いてほしい。今度はこの会で話題となっている1つの小学校から1つの中学校へ行くということを前提としたレベル3である。東陽中へは田二小と田辺東部小が進学している。明洋中へは田三小と芳養小。高雄中へは田一小、稲成小(大坊小)、会津小から。新庄中へは新庄小と新二小、中芳養と上芳養は現在のまま、上秋津中(秋津川中)へは上秋津小からと秋津川小から、衣笠中は三栖小、長野小、伏菟野小から。平成24年以降の生徒数の推移で考えたものである。次に平成33年の場合は上秋津中と秋津川中とともに高雄中学校へ。中芳養中と上芳養中は合わせても150人を維持できていないので明洋中と一緒にすることになる。それから旧の町村の中学校は、平成24年度、既に、150人以下になっているが、地域性を考えて旧の町村に1つの中学校ということにしている。教職員数の場合、平成21年度の生徒数、学級数等の現状でいくと166人であるが、統合するとそれが133人になる。それから平成33年度の合計のところは116人となる。以上である。

A委員 : 小中に分けて協議したいと思う。ここに示したものは、あくまでも案である。平成27年で150人に達しない学校は( )でくくっている。旧田辺市以外の場合、150人を規準にすれば、いずれの学校も達しないが、通学距離等を考えると、致し方ないかも知れない。それから追加で出された教員数であるが、平成27年で小学校教員は174名、現在は246名。70名ぐらい減る。学校数が減るということは学級数が減ることであり、そして教員数も減ることである。また学校数が減るということは校長、教頭が減ることでもある。これらのことについて、ご質問やご意見はないか。

G委員 : 小学校の14番の旧大塔ですが、鮎川小、三川小、富里小が統合するという案になっている。そこで、通学距離の関係で少し意見がある。前回からの話で出されているが、現在は通学時間に1時間以上かかるという話であるが、27年度には30分以内でいけるようになるのか。そのようなことをどのように考えるか。

A委員 : 大塔地区の3小学校が統合すると、通学時間はどうなるのか。

事務局 : 端的に言ってB地区のことか。基本的には統廃合の方向であるが、個別の事情が各地域にはあるので、そんな地域は考慮していかなければ行けないと思う。そして、個別事情がある地域では、統廃合が遅くなる場合も考えられると思う。

G委員 : そういう含みがあるということか。わかった。事情を考慮しながらやるということか。

A委員 : ケースバイケースである。

H委員 : できるところから始めたらどうか、一度に、レベル3を進めることはできないので、できるところ、できるようなところから進めていけば良いのではないか。

A委員 : 施設をどうするかという問題もある。また、この人数では将来的には、旧の町村で1小、1中にならざるをえないのではないか。しかし、これは弱みと言うだけではない。1小、1中は強みでもある。それを生かせるような取組を工夫すれば良いと思う。

H委員 : 全部、そうしなければならぬということなのか。

- A委員 : 答申はどこまで書くか、時期は書けないと思う。地元との協議もあるだろうし、検討するには時間がかかると思う。しかし悠長にかまえることもできない。また更に少子化が進み、1からやり直しをしなければならない状況が出るかも知れない。
- E委員 : 少子化になると教師の数が減るといふことか、余ってくるのではないのか。
- 事務局 : 学級数が減ると教師の数が減るかどうかは、県の基準も変わる可能性もあるので、一概に言えない。現在の県の基準では、このような数字になるということである。その数を載せている。教員数が将来、余る場合もある。また、学級編制の形態が変わる場合もある。
- E委員 : 悪い先生が多いというわけではないが、良い先生を選べるということか。
- I委員 : 平成27年度になると本宮地区の小学生は100人を切る。児童数で考えると、100人なので、本宮小学校の校舎に入れることができる。しかし、本宮小の校舎を利用するとなれば、通学距離のことで色々問題が生じてくると思う。
- J委員 : 本宮小までは、30分以内で通学できる。だから、40分以内というのはクリアできると思うが。
- K委員 : 通学距離が30分、40分以内であれば、統合を進めていくということか。このような通学距離になるように校舎を建設するということなのか。
- 事務局 : この資料は、児童数が将来こうなるという予想のものである。各委員からの意見にもあったが、どこに学校を設置するかという話ではない。今までにも話をしているが、今回いただく答申をもとに、教育委員会が地域に出向き説明することになる。その時に、このような話が出てくるのではないかと思う。それぞれの地域によって事情が変わると思う。だから、このようなことは、各地域での話し合いにならないと分からないと思う。この資料は一般的にこのようになるというものである。
- H委員 : 今の話と直接関係ないが、廃校後は校舎が荒れると聞いている。跡地利用については何か考えはあるのか。
- 事務局 : 確かに、廃校後の跡地利用は問題になっている。基本的には地元でどのようにしていくかであるが、教育委員会だけではなく、市全体で考えていきたいと考えている。殿原小や宮代小については、現在、跡地利用の意見をいただいている。その内容を検討したいと考えている。
- I委員 : 廃校後どう活用するかは地元で話し合いをするが、教委を通していくのか。
- 事務局 : 例えば、福祉施設を利用するという話があれば、その場合は、保健福祉部、行政局の住民福祉課がセットになって教育委員会に打診してくるということになる。教育委員会として良い方法があればどんどん活用していきたいと考えている。各部署で検討して頂き、田辺市あげて考えていきたい。
- I委員 : 耐震がダメだとなると、地元にも置いてもらっても活用できない。耐震構造にしていだいて、使いなさいということにはならないのか。使い物にならない施設なら、更地にした方がまだましなのではないか。
- A委員 : 国庫補助金を利用している関係上、転用は簡単にいかないと思うのだが。
- 事務局 : 少し法律は緩くなったが、補助金を受けて建設している場合は、何年間かはそのままおこななければいけないようになっている。

A委員 : 跡地というようなことも含めてだが、旧の町村の場合、個別の事情がある。全国的に見ても、このような過疎地域では、小中一貫校をつくっていくことや、小、中に更に、幼稚園を加えとか、福祉関係の施設をつけるとか、児童生徒だけでなく大人達を含めた多くの人があるような施設にするということも考えられる。また、このようなことも考えられる。スクールバスの時間帯にもよるが、スクールバスを地域住民が利用するという事も考えられる。行政も縦割りでない取組が大切である。こういう形で答申に載せるということによろしいか。

B委員 : 地域から学校がなくなっていくとどうなるか。実際に龍神地域で、児童数の減少により学校が統廃合されてきているが、統合により地域はどうなってきたか聞きたい。

A委員 : 学校がなくなったとすると、あくまでも一般的な傾向ですが、学校がなくなると若い人が集まらないことはある。どこまでどういうふうに答申に盛り込むかであるが、どういう形の学校施設づくりにするかということが大切である。これからも議論していかなければいけないと思う。残して利用する方向を考えても良いと考える。お金の問題もあるが。

K委員 : 龍神地区では合併を何度か行ってきている。現在5つの廃校校舎がある。また、宮代小、殿原小、東小の地域については、今年統合したばかりなので、まだちょっと地域になじみがないかも知れない。しかし、咲楽小学校などは、地域の皆さんと連携して頂いていると思う。合併したことにより、地域に影響があったとは思わない。しかし、廃校校舎については問題である。

A委員 : 施設のあり方についてどこまで答申に盛り込むかは、これから考えたいと思う。それでは、今まで話しあってきたことを答申に盛り込みたいと思う。

#### 中学校

A委員 : 資料の1 - (1)の表は、通学区域を、現状の進学状況に基づき予想したものである。上が平成21年度、下が平成33年度の生徒数を基準にしたものである。これは小学校がどのような組み合わせで統合するかによって変わってくる。

事務局 : 先ほど平成33年度の教員数の話しをすることができなかった。平成33年度まで、統廃合を全くせずに現状のままでいくと、平成33年度には教員は142人である。これは校長・養護教諭・加配・特別支援学級等を入れず単純に普通学級で計算したときの数である。統廃合した場合は、平成33年度には118人・116人となり、約20人程度の教職員が必要なくなるということである。

A委員 : 教員数については、今の学校数でいけば、平成33年度には142人。今示した形で統合した場合は、116人か118人になる。現在は166人いる。40人以上が減ることになる。また、1 - (2)の表の方は、大坊小が稲成小か中芳養小のどちらかと統合するのかの違いである。2の表は、複数の小学校から1つの中学校へ行くという場合を解消した形である。つまり、1つの小学校からは1つの中学校へ進学するというのが中学校の2の表である。今後は、どの組み合わせがいいのか検討することが必要である。旧の町村は、小学校と同じように中学校は1つになるが、それでも150人には届かない。これ

でいくと部活動の種類は十分にそろえることができないということも考えられる。小規模の学校では、いろいろな学校間の交流が必要であり、その場合は、教員が多くいるほうがいいと思うが、学級数における教員数は決まっているので、簡単に多くすることはできない。

H委員 : 中学校の表2だが、例えば東陽は、田二小と東部小全部となっているが、これもスムーズにいくのも難しいと思う。東部小で高雄中へ行っている子も多いので、抵抗があるのではないか。

事務局 : 田辺市のように1つの小学校から複数の中学校に進学することは全国的には異例で、普通は1つの小学校から1つの中学校へ進学するのがほとんどである。それでも以前は、生徒数や児童数が非常に多くて、例えば3つの中学校に分かれ進学するにしても、40人以上が同じ学校に入学するという状況にあった。それが、生徒数の減少とともに、小学校から中学校に進学するとき、10人以下という状況が現在は出てきており、場合によっては2~3人だけが別の中学校に進学するという異質な状況が出てきている。また、小中連携を行う場合も1つの小学校から複数の中学校へ行く場合は、連携するのが難しい。そういうことから、1つの小学校から1つの中学校へ行くという形で考えてみた。実際は、田辺東部小学校・会津小学校・田辺第二小学校・田辺第一小学校の4校が、複数の中学校に分かれて進学するという現状になっている。だから、この4つの小学校をどこの校区に指定するのかということがポイントとなる。例えば新庄中では、新庄小と新庄第二小から入学する。これを割るとするのは非常に難しい。そこで、先ほどの4つの小学校の卒業生がどの中学校に進学するのが最も適切になるのかを考えた。例えば高雄中に東部小学校卒業生全員がということになると、高雄中学校の生徒数が大変多くなる。また、東陽中学校は、現在、田辺第一小学校、田辺第二小学校、田辺東部小学校の3校から入学しているが、この中で田辺第一小学校が東陽中学校に入学するという可能性はあるが、今の状況からすると大多数が高雄中学校に進学しているので、高雄中学校に設定した。そうすると東陽中学校が田辺第二小学校だけになってしまうことや、高雄中学校が非常に増えるということなどから、田辺東部小学校は、東陽中学校へ入学するという設定にした。また、高雄中学校は現在、稲成小学校の全員と会津小学校の半数が来ている。会津小学校の生徒を割らないということであれば、衣笠中学校・高雄中学校・上秋津中学校のいずれかに進学することが考えられるが、現在の生徒数の状況、以前からの学校に進学してきた状況を考えると、衣笠中学校や上秋津中学校に会津小学校全員が入学するというのは、無理があると考えられる。そこで、会津小学校は高雄中学校に全員進学するという形が最も適切ではないかと考える。また、田辺第二小学校は2校に分かれているが、この卒業生のほとんどが東陽中学校へ入学し、しかも田辺第二小学校と東陽中学校は近隣であることから、当然東陽中学校であろうということになる。以上のような理由で、このような配置を設定した。あとの4校の小学校以外は現状のままである。

A委員 : 大変論理的によくわかった。

G委員 : 小学校は資料が1つであったが、中学校は1 - ( 1 ) の表から2の表まで資料



が3枚あるが、どれかにしぼるということはないのか。

事務局 : 基本的には2の表ということである。校区を1つの小学校から1つの中学校とすることを前提とし、校区を設定し、その中で学校配置を考えている。だから2がメインである。

A委員 : 小学校が複数中学校に分かれる状況を解消するということも考慮すれば、2の表であると思う。

H委員 : スポーツや文化クラブにしても、これを融通しないということか。例えば自分がある程度スポーツに技能があり、東陽中学校よりも高雄中学校へ行きたいという場合も、それは理由にならないのか。

A委員 : 部活動で選べるかどうかは、次回に議論したい。

E委員 : 今まで通りの校区でいけば、1-(1)の表では、平成33年に衣笠中は253人となる予想だが、会津小学校全員が高雄中学校に進学するとすれば、もう衣笠中学校が平成24年の時に、本来であれば278人が190人に、平成27年になると153人になってくる。会津小学校は、児童数が増える傾向であり、平成21年度から平成27年度には550人となっているので、その辺、衣笠中のことを考えると、1つの小学校が1つの中学校ということはいいが、児童数が多い小学校では、全ての児童が1校というよりも、多少、分かれるということも考えておいた方がいいのではないか。

A委員 : アンケートでは、1つの小学校から複数の中学校に分かれていくということは問題であると答えた人は、それほど多くなかったと思う。ただし、自由記述を見ると、当事者は結構大変であり、「友だちと別れる」などという意見もある。今の意見からすれば、やはり1つの小学校から1つの中学校へみんなそろっていくという原則をたてた上で、会津小学校から来なくなれば衣笠中が小さくなってしまおうということや、高雄中学校が大きくなりすぎるようなこと等があるので、検討する必要があるかも知れない。

事務局 : 実は今、委員長からもあったように、アンケート調査では、学校を分かれて進学するのは、問題であるという意見は少なかった。しかし、私どものところに相談に来る方は、田辺第一小学校から明洋中学校へ行っておられる方や会津小学校から上秋津中学校へ行っておられる方など本当に少ない人数の方が来られ、区域外や校区外の申請について相談される。該当の保護者というのは非常に少ないが、それにあてはまっている保護者や子どもたちにとってみると、非常に負担を強いており、校区などの相談に来られる場合が多い。その時に「こういう校区になっているので仕方ない。」というように説明をするが、現状を見ると、中学校に進学するときに本当に少人数の子どもを別の中学校へ行かせる、行かなくてはならないという現状にはやはり無理がある。会津小学校の場合は、衣笠中へ行く数は多いので、衣笠中へ行くことについては、あまり抵抗はないと思うが、それは後々のことを考えると、どこでそういう状態が起こってくるかわからないというようにも思える。今の段階で小学校がそのまま1つの中学校へ行くというシステムになっていけば、そういう状態は起こってこない可能性がある。また、ご指摘のあったように、高雄中学校が非常に大きくなるという状態になる。それは、会津・三栖の周辺の人口があまり減っていない。現状の

ままで平成33年度まで見ると、高雄中学校は、平成33年度が最も生徒数が多い状態になる。そういう中で会津小学校の卒業児童全てが、高雄中学校にということになればアンバランスな状態になるという課題が残る。稲成小学校を明洋中学校に進学させる案もあるが、現状の中ではそれは難しいと考える。よって、こういう形となった。ただ、ご指摘があったように高雄中学校の人数が増えるという課題は残る。

C委員：過去に三栖中学校から衣笠中学校に校名を変更して、校区変更したといういきさつがあるが、その整合性は問題ないか。三栖の地域の方は、「三栖中が三栖中でなくなった。」という言い方をされる方がいるが、また戻すとなったら、ちょっとひっかかるのではないか。

事務局：あると思う。どちらかと言えば、三栖地区の方は、このことについては、反対の意見が出てくるのではと予想はしている。

C委員：校名もおそらく変えてほしい。元に戻してほしいということになるかもしれない。そこが気になる。

事務局：地域に説明に行けば、意見があると思う。数字だけの説明になるので。

E委員：現状の中で、会津小学校から上秋津中学校へ行く子どもが少ないということも聞いたが、今後衣笠中学校に行く人が少なくなれば、校区を選ぶことも必要ではないか。そうすれば、高雄中学校の人数がふくれあがることも解決すると思う。例えば、将来的に衣笠中学校に進学する人数が減少し、35人以下になれば、校区を選べるようにするとかはどうか。そうすれば、妥協案として、将来的なことや校長先生がおっしゃった過去の経緯的なこと等が解決できるのではないかと思う。

A委員：自由選択を実施することか。それも1つの考えであると思う。時期を決めなければならぬと思うが。

D委員：C委員が言われたように、衣笠中学校をつくったときにかなり対象地域の方や保護者の方から強い意見があった。旧市内の中学校で衣笠中学校だけが、学校を新しくして大きく校区を変え、新しい学校を新設した。だから、会津小学校から上秋津中学校へ進学している子どもとは、意味が違ってきている。衣笠中学校については、会津小学校の児童が全て進学することは難しいと思う。また中万呂・上万呂も含め会津小学校全部を高雄中学校へとなると全く元に戻ってしまうので、これも難しいと思う。

J委員：今、会津小学校のことで話し合われているが、旧市内の地理のことは詳しくわからないが、前の資料では、会津小学校から高雄中学校へ行くのは50人くらいで、衣笠中学校へ40人くらい行くとしたら、衣笠中学校へ行く40人を会津小学校の校区から分けて別の学校にする。高雄中学校へ行く校区の子どもはそのまま会津小学校で、衣笠中学校へ行く40人ほどをどこかの小学校の校区にして、そのまま衣笠中学校へ行かせることも出来ると思う。小学校から校区を変えるということである。

C委員：三栖小学校にするということか。

J委員：三栖小学校は近いのか。

C委員：校区を三栖小学校にして、衣笠中学校に進学させるということか。

- D委員 : 三栖小学校の校区に中万呂・上万呂をして、三栖小学校にということか。
- J委員 : 中学校なるときに、結局、衣笠中学校へ行くのであれば、その方がいいのではないか。今の会津小学校をそのまま高雄中学校へ行かせるのは、無理があると思う。小学校の校区も見直す必要があると思う。
- A委員 : 選択肢としては、それも考えられる。
- H委員 : この問題については、我々、あり方検討委員会ではなく、各町内会で議論する方が良いと思う。我々だけで話を進めていくのは容易なことだが、校区を変えるというのは反対意見も多いし、難しいと思う。この校区問題は、この会だけで取り上げる問題だろうか。例えば、田辺第二小学校の校区協議会とか、そういう会でも検討してはどうか。
- A委員 : 先ほどから言ったように、中学校の校区のあり方については、小学校のことも含めて、次回に本格的に話したいと思うが、今日、結論は出ないが、いろんな意見を言っていただきたいと思う。
- E委員 : 仮に平成24年度から、会津小学校が高雄中学校になった場合、平成23年度までは今の校区で行き、それが翌年の平成24年度から急に1つの学校になった場合、友だち関係もふくめて、生徒数が変わりすぎる。過去に中学校の名前を衣笠中学校に変えて新設もしたという経緯があるので、1小1中学校という大筋はあるが、会津小学校は児童数が多いので、あまりそれにこだわりすぎると本末転倒になり、違った問題が起きかねないと思う。
- D委員 : 先ほど言われた校区の線引きについては、別問題であると思う。以前は校区検討委員会でやっていた。例えば東部小学校であれば、東部小学校の下は新庄番地であり、その児童は東部小学校へ来ている。そして、その子の進学する中学校は新庄中学校である。そう考えると市内には何カ所か部分的に気になるところがある。しかし、そのような特殊な例は、別の形の検討が必要だと思う。
- A委員 : しかし、言えることは、一定、校区のあり方についての指針を示すべきだと思う。だから、そういう議論をしないといけないと思う。そうしないと、また校区をどうするのか、同じ事の繰り返しになる。だから、次回も含めてしっかりと議論しなければならないと思う。まず、1つの小学校から複数の小学校へ分かれたい。ということを実行としてたてるかどうか。そうでなければ選択制にする。該当地域は、中学校を選べるようにする。例えば、会津小学校から複数校に行っているが、その子は選べるようになる。そのようなことは、次回検討したいと思う。また、部活動の問題もある。部活動を理由に選べるようにするというのも関わってくるので、その問題といっしょに議論したいと考える。さらに、J委員からご発言があったように、1つの小学校が複数の中学校に分かれたいということが大事であれば、小学校の校区も見直していかなければならない。そのような複合的な要素が出てきたし、三栖地域のような地域の事情も考えなくてはならない。そういうことを踏まえた、しっかりと案を出し、中学校はこういう方向で行く、としたいと思う。そうさせていただいてよろしいか。また、小学校と同じように将来的には、1つの中学校にしていく、ということでもよろしいでしょうか。言い換えれば、1つの旧町村には1つの中学校を残す、という方向でもよろしいでしょうか。

B委員 : 中学校の場合は、個人的な意見ですが仕方ないと思う。

A委員 : ただ、この旧町村は、150人に達しない中学校が多く、かなり少ないところもある。距離や地域性を考えればやむを得ないと思われる。とすれば、集団的な教育活動を意識的意図的に行わなければいけない。例えば、部活動を合同でし、合同で試合に出るとか、そういう工夫が求められるということも、議論していかなければならない。今は、大塔中学校と中辺路中学校が柔道を合同で行っていると聞いている。

C委員 : それができるというのは、大塔柔道会という組織があって、そこがバックになっているのでやっている。

A委員 : それでは、他に意見はございませんか。次回は中学校について、引き続き議論していきたいと思う。これで第7回の委員会を閉会する。